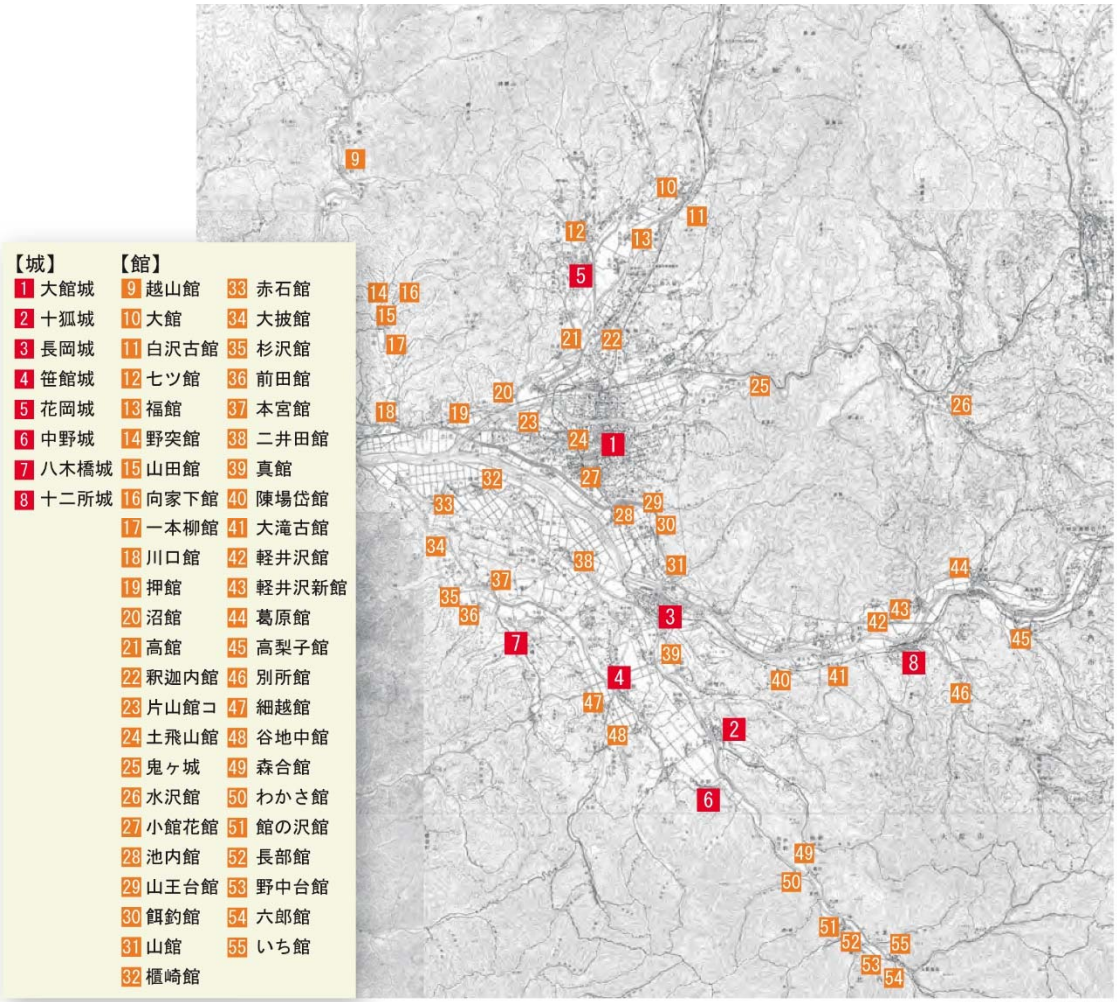
６．浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致

独鈷には、１６世紀に浅利則頼が再建した大日堂（現社殿は１７世紀再建）の他、独鈷囃子や諏訪八幡神社など浅利氏が残した歴史的資産がある。独鈷囃子保存会が独鈷囃子を伝承し、独青団（地元青年の団体）が諏訪八幡神社や諏訪の松様の祭祀を続けるなど、地域の人々によって大切に保存されている。

（１）大館地方と浅利氏

永正 15 年（1518）大館地方に移った清和源氏義光流の浅利則頼が最初に築城したのが十狐城である。則頼は、独鈷を本拠地として大館地方各地に城館を築き、家臣団を配し、城館を拠点に開墾開発を進めて「前田」と呼ばれる広大な田園を作り上げ、この地方に近世の礎を築いた。

則頼以前に明確にこの地方を統治した人物は知られておらず、その後の支配者たちの本拠地も、この地方に置かれることがなかったため、則頼及び浅利氏は、最初で唯一の殿様として、この地方の人々から深く敬愛されている。



大館市の城館分布図

大館地方に広く残る城館跡

（２）独鈷大日神社と独鈷囃子

①大日神社

大日神社は、大永２年(1522)浅利氏と南部氏との戦いで破壊されたものを、同６年(1526)十狐城主浅利則頼が五間四面のお堂に改築し、その後浅利家の氏神となった。

現在のお堂は、寛文12年(1672)に十二所城代塩谷重綱が再建したもので、大正 14 年(1925)に神殿を、昭和 33 年(1958)に幣殿を増築して現在に至っている。

独鈷大日神社

伝承によると神亀２年(725)創建、例祭は毎年旧暦の５月 28 日、本尊は大日如来である。僧行基が１本の桂の木から３体の大日如来像を刻み、ここ独鈷のほか鹿角市の小豆沢、長牛の３カ所の大日堂に奉置したとされている。その３体のうち小豆沢と長牛の２体は焼失しており、独鈷にのみ現存する。江戸時代までは、大日堂と称して神仏混交の形態をとっていたが、明治に入り神明社となり、本尊大日如来は、主祭神大日霊貴命となった。その後平成元年(1989)、社名を大日神社と改めた。

例祭

旧５月 27 日、宵宮は午前９時の鎮火祭から始まる。４人の神職が独鈷の各家々を回り水と塩でお清めをする。その後午後５時に宵宮祭が行われ、神事の後、後述する独鈷囃子(剣囃子)が奉納される。

旧５月 28 日、例祭は午前 11 時に行われる。開扉の儀、献饌の儀の後祝詞が奏上され、裃を付けた役員が玉串を奉奠する。一連の神事が滞りなく終了すると、前庭で湯立の儀が行われる。湯立は当年の米の作況を占うもので、鉄の大鍋に沸騰させたお湯を神職がわら束でかき混ぜ、泡の量や大きさなどを見て豊凶や病害虫の発生について判断するものである。

湯立の儀

菅江真澄が歌に詠んだ浅利則頼遺愛の『琵琶』など９件の市指定文化財を有する。

また、牛の絵馬が多数奉納されていることでも有名である。

安永８年(1779)奉納の牛の絵馬

浅利則頼遺愛の琵琶

②独鈷囃子(市指定無形民俗文化財)

永正(えいしょう) 15 年(1518)に十狐城を築いた浅利則頼が、十狐城完成を祝う酒宴の席で自ら剣を取り舞ったのが剣囃子(けんばやし)である。則頼はこの喜びを後世まで伝えるよう城内の女性に銀扇(ぎんせん)を与え踊らせたとされており、これが独鈷囃子の始まりである。

その後一時廃れていたが安政(あんせい)年間(1854-1860)独若組(どくわかぐみ)(現独青団(どくせいだん))によって復活した。古い記録は失われているが、昭和 39 年(1964)独青団事業計画の中に「氏神祭典事業囃山挙行」などが見られる。

独特の調子と踊り、長い伝統が評価され、平成 12 年(2000)12 月 6 日比内町の無形民俗文化財に指定され、平成 17 年(2005)市町村合併により大館市の無形民俗文化財となった。

独鈷囃子　山車の様子

現在伝わるのは次の 4 つの囃子である。

寄せ囃子(よせばやし)　この旋律は笛の吹き手に任されており、神が宿るごとく心のままに吹かれる音に、太鼓がそれに合わせ次第に盛り上がっていく囃子である。

本囃子(ほんばやし)　これは山車が移動する際の囃子で、リズムがスローダウンし、ゆったりと山車が動くイメージである。踊り付。

剣囃子(けんばやし)　古風な調子の囃子で、町内の要所ごとに山車が停車し、踊りを披露する。

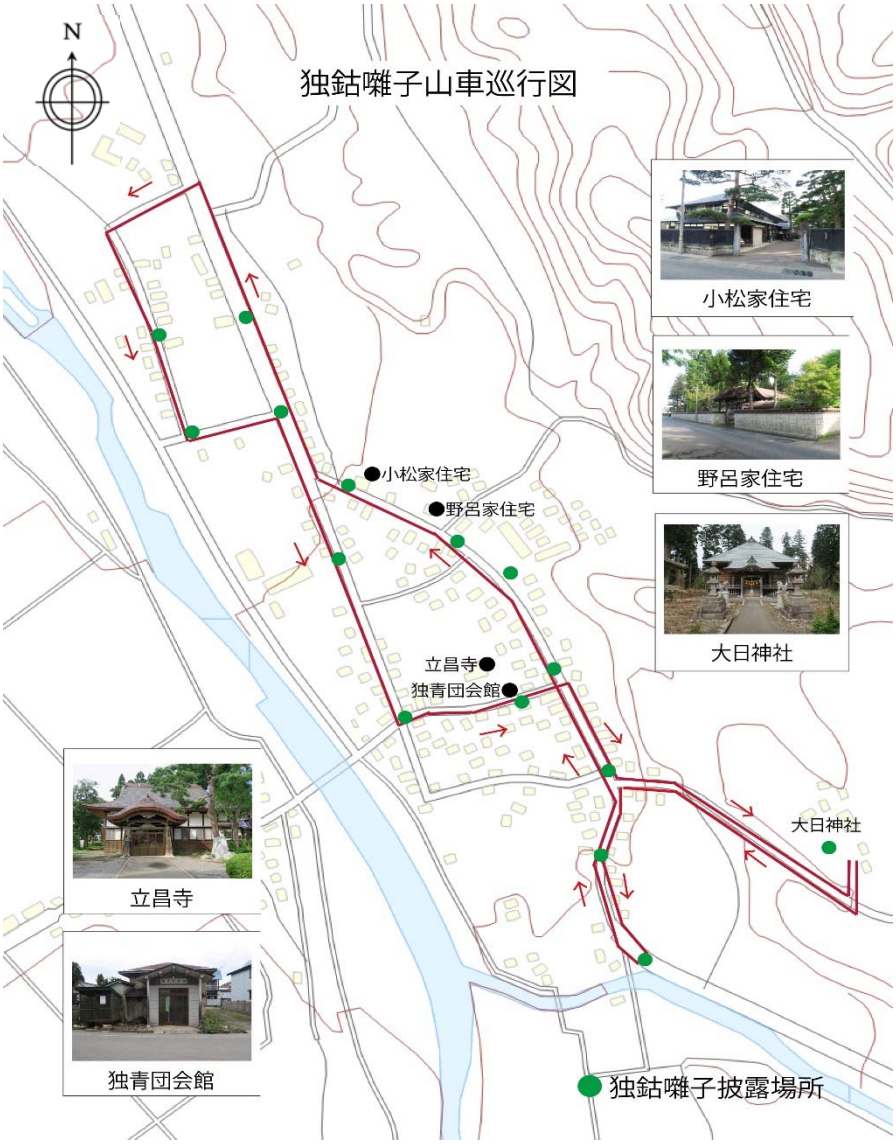
帰り山車(やま)　神社に帰るときの軽快な調子の囃子である。

囃子方は、笛(４調子の７穴)・太鼓(大・小)・三味線・鉦鼓(しょうこ)

大日神社例祭の宵宮午後６時、保存会会長以下が本殿でお祓いを受け、本殿前で剣囃子が奉納される。奉納が終わると神主から金御幣を頂戴し、浅利家の家紋である雁金の提灯を軒下にぐるりと廻した山車にその金御幣を飾って町内へ出発となる。古くは山車の下を踊り手と囃子方が歩いて回ったが、現在は共に自動車に引かれる山車に乗るようになった。

奉納される独鈷囃子

山車に乗る踊り手は主に女子小学生で、白鉢巻きを向うに結び、紺地に白く雁金を染め抜いた袢纏を着て橙色の扇子を持つ。囃子方は独鈷囃子保存会の面々で、橙地に白く雁金を染め抜いた袢纏に、同じく白の向う鉢巻きである。山車の運行は、白地に赤い「独若」の文字の袢纏を着た独青団が担当している。



寄せ囃子や本囃子で運行された山車は町内十数箇所に止まり、剣囃子が披露される。人々は門口に出て山車を迎え、にぎやかな祭をたのしむ。

独鈷囃子山車の順路には、次のような歴史的建造物がある。

出発地点は大日神社、現社殿は寛文[1]12年(1672)の建築。大日神社の高台から住宅地へ下りていくと、曹洞宗の寺院立昌寺(明治築)があり、野呂家住宅(明治築)がある。野呂家は、甲斐より浅利則頼に随ってきた旧家で「甲斐国より召し連れ候家臣」の筆頭にあり、初代は野呂左馬之助。当代も同名である。その隣には小松家住宅(明治築)がある。小松家は、江戸時代肝煎を務めた旧家で、近世の資料が数多く残されている。最後に剣囃子が披露されるのは、独青団会館(昭和4年(1929)築)。後述する独青団の会館である。

そして、ひと通り町内を回った山車は、帰り山車の軽快な囃子で神社へと帰っていく。

初夏の夕刻、賑やかに照明をつけた山車が、♪ヨーイヨイ・ソレ・イヤサカサッサーと練り歩く姿は、農作業が一段落した地域の長閑さを象徴する風景であり、大日神社前で奉納される剣囃子は、先人の偉業と地域の歴史を思い起こさせる、郷土の宝である。

③独鈷囃子保存会

独鈷囃子保存会は昭和56年(1981)に結成された。保存会結成以前の独鈷囃子は、民謡を主体とした芸能愛好家の団体が伝承していた。この団体は、大日神社例祭はもちろん、隣村や大館、扇田、大滝など近郷の祭典に招かれては披露し、花見会やたんぽ会などにも呼ばれて喜ばれていたが、無形民俗文化財として保存していこうとの機運が高まり、保存会として結成されたものである。大日神社に隣接する大館市民舞伝習館を稽古の場として、地域の子供たちに伝える活動を続けるほか、学校や地域の文化祭、運動会、老人ホームの慰問、比内とりの市など様々な場面で披露されている。最盛期は大人20名子ども20名、計40名以上の会員を擁し、例祭に山車を2台出すほどであったが、少子高齢化の中で漸減している。

独鈷囃子保存会の練習風景

近年は、地元の東館小学校もふるさとキャリア教育の一環として独鈷囃子に取り組み、正課クラブなどでその継承に努めている。

また、秋田県の民俗文化財公開交流事業など、発表の機会をとらえて、独鈷囃子の普及に努めている。

民俗文化財公開交流事業の様子

（３）浅利氏の歴史的資産と独青団

①浅利氏ゆかりの歴史的資産

大館地方の歴史上、明らかに独立領主として勢力を保っていたと言えるのは浅利氏である。東の南部氏や西の秋田氏と争い、最盛期の支配圏は現在の大館地方をこえていたが、本拠地の十狐城を構えていたのは独鈷であった。独鈷の人々が昔を思い、自らの源流を考えるとそこには浅利氏がいて、アイディンティティを構成する重要な要素となっている。

16 世紀、浅利氏が活躍した時代、大館地方の中心地である独鈷を通る本道は、大日神社の高台を通っていた。北の扇田から独鈷を通って大葛（おおくぞ）へ行く場合、扇田から横沢（よこさわ）を通って味噌内（みそない）に入り、僧行基（そうぎょうき）の伝説が残る珠数掛（じゅずがけ）の地を通って山中を進み、この高台に着いた。大日神社からはこのまま高台を進んで沢村（さわむら）に降りて、大葛に向かっていた。この道沿いには、十狐城主浅利氏ゆかりの以下のような場所が点在しており、歴史の道となっている。

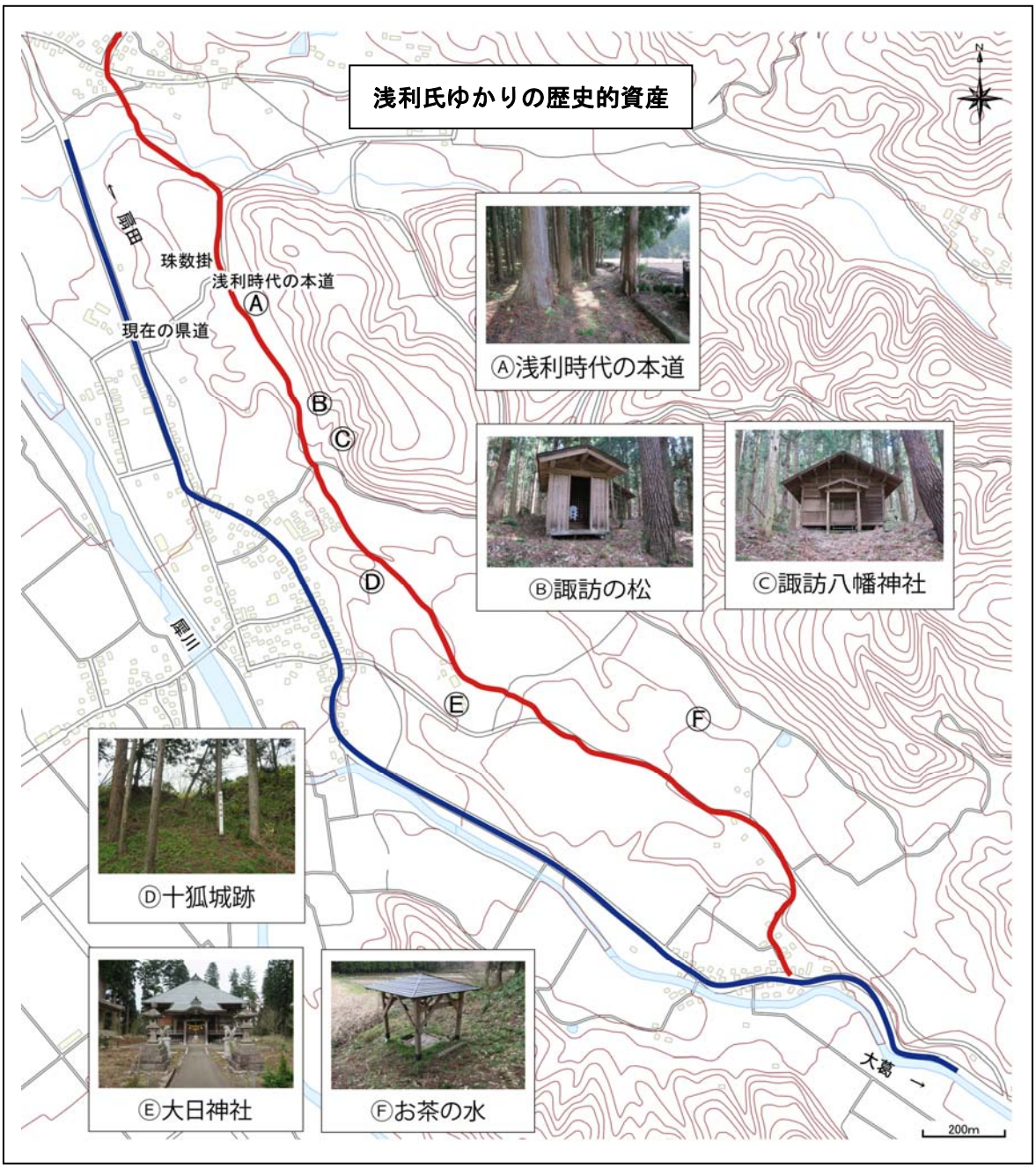
P138 の図中Ⓐは浅利時代の本道である。写真は珠数掛の地から南を見る。現在は軽トラックがようやく通れる程度の細い道となっている。

珠数掛から南下すると左手にしめ縄をした松と祠（ほこら）（昭和・戦後築）がある。Ⓑ諏訪（すわ）の松である。諏訪八幡神社の脇に立っていて、初代は珍しい四葉の松であったが、暴風のため明治 24 年(1891) 8 月 12 日に倒れ、現在立っているのは２代目である。初代の諏訪の松は倒れた際血をふいたと言われる。その初代は２本の丸太として残っており同年 11 月 30 日元の位置に祠を建てて１本、大日神社の長床に１本祀られている。柳田国男の『日本の昔話』に「松子（まつこ）の伊勢参り」として登場する。独青団が「諏訪の松様」として管理しており、毎年１回春に例祭を行っている。

諏訪の松の隣には、Ⓒ諏訪八幡神社(現社殿　明治 38 年(1905)築)がある。浅利則頼が十狐城築城の際に城の鎮守として勧請（かんじょう）した。独青団が管理しており、毎年１回秋に例祭を行っている。

さらに南下するⒹ十狐城跡(築城(永正15年(1518)))があって、現在は当時の堀切が残っている。十狐城は浅利氏の本拠地で、舌状台地に空掘りを配し四郭からなる。現在は畑などになっているが、独青団が通路などの草刈りをしている。十狐城の南にはⒺ大日神社(現社殿(寛文12年(1672))築)がある。浅利氏入部以前からあったとされているが、浅利則頼が再建(大永6年(1526))後に浅利氏の氏神となった。ここでも、独青団が境内の草刈りをしている。

本道から少し離れ、北側の沢に降りるとⒻお茶の水(言い伝えによると16世紀築造)がある。中世の八角石造りの井戸で、浅利氏がお茶の水を汲んだとも、姫君が身を投げたとも伝えられる。ここもまた、独青団が草刈りをしている。



②独青団の歴史と活動

独青団は、独鈷本村在住の青年により構成される団体である。

創立は明和年間と言われており、慶応２年(1866)には、独若組として諏訪八幡神社に唐獅子舞を奉納したとの記録がある。明治 40 年(1907)初めて規約を制定して独若連中と称し、大正８年(1919)規約を改正して独青団となった。大正５年(1916)に結成された官制の青年団とは一線を画し、諸社の祭典、盆踊り、自警団など独自の事業を展開した。その多くは一部形を変えながらも現在まで続いている。

独青団会館

昭和４年(1929)国有林の下刈りで得た賃金などをもとに会館を新築した。その後昭和 35 年(1960)外壁をモルタルで補強するなどしたものが現在の会館である。

明治時代の独若組の組織は、若者頭、蔵元(会計係)、箱元(庶務係)、伍長、小走で構成され、主な行事としては、神明社(現大日神社)祭典時の余興、神明社以外の諸社の祭典主催、虫追い、盆踊り、風紀取り締まりなどとなっている。

鳥居を設置する団員

現在の独青団は、団長、副団長、会計係、総務係、社務係、会館係、街灯係で構成され、年１回の総会のほか、独鈷囃子の運行、諏訪八幡神社など浅利ゆかりの諸社の管理と祭典の主催、盆踊り、大日神社などの草刈り、街灯やカーブミラーの管理を行っている。明治時代と比べると、虫追いが無くなったことと、風紀取り締まりの代わりに街灯管理を行っていることなどが違いとなっている。

早朝大日堂境内を刈払いする団員

独青団は 100 年以上にわたって、独鈷囃子の山車の運行を担当し、諏訪八幡神社などの管理をし、社殿が壊れれば修理又は改築し、鳥居が倒れれば自分たちの山から木を切り出して再建奉納し、浅利氏が開いた郷土の文化と風景を守り続けてきたのである。

お茶の水の保存作業をする独青団員

歴史の道の刈払いをする独青団員

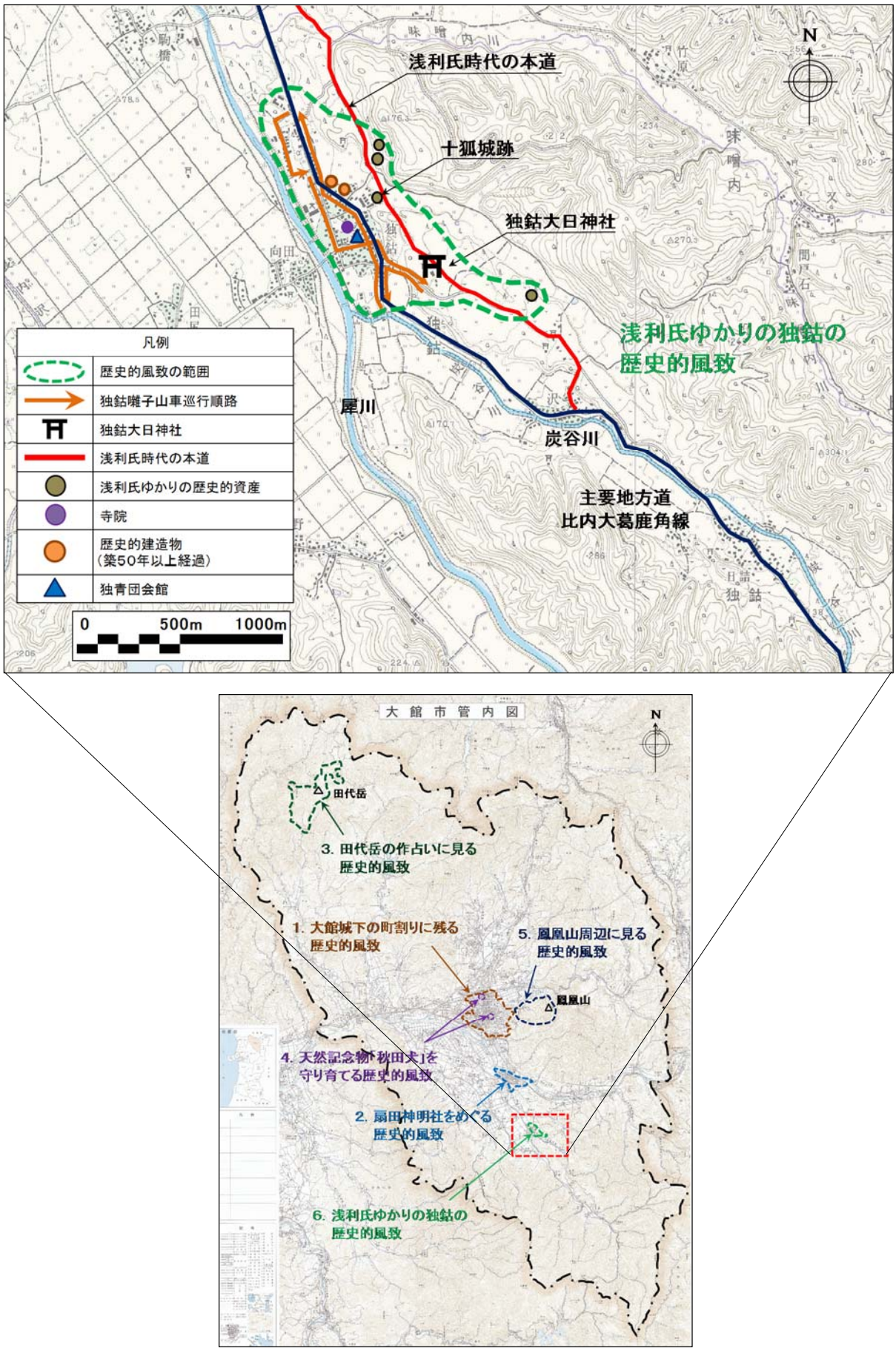
（４）まとめ

独鈷の人々は、かつて独鈷が大館地方の中心地であったことを誇りとしており、独鈷を中心地たらしめた浅利則頼をたいへん尊敬している。浅利氏に代わって、秋田氏や佐竹氏の支配を受けることになってもなお、浅利氏を敬愛し続け、独鈷囃子や浅利氏ゆかりの歴史的資産を守り続けてきた。

囃子山奉納時の独青団と独鈷囃子保存会の面々

前列中央の礼服姿が独青団団長

伝承 1500 年前創建の大日神社に、500 年前の独鈷囃子が奉納され、同じく 500 年前に甲斐（かい）から浅利則頼に随従してきた家臣の家々を廻る景色と、それを伝承する独鈷囃子保存会の活動。同じく 500 年前の浅利氏の歴史的資産を守る、250 年の歴史を持つ独青団の活動。これらは、後世に伝えていかなければならない、大切な大館市の歴史的風致である。



浅利氏ゆかりの独鈷の歴史的風致の範囲

【コラム】

○ダンブリ長者伝説と大日堂

古伝承によれば、大日堂は第26代継体天皇の建立と伝えられている。

この地方に伝わる「ダンブリ長者」伝説によると、長者となった夫婦の娘、吉祥姫が第26代継体天皇の側女となり、長者夫婦の没後、天皇の命を受けて鹿角市の小豆沢・長牛、比内の独鈷に大日堂が建立されたという。

吉祥姫の母(徳子)は独鈷に生まれ、長者伝説の神託を授かったということから、この地がダンブリ長者伝説の発端と考えられている。

※写真は、比内庁舎前にある石碑(ふるさと比内会建立)

ダンブリ長者の碑